



発行日 = 2009 年 7 月 25 日 発行人 = 面出 薫 編集 = 矢野大輔・三宅博行・井本有衣子
照明探偵団・事務局 〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティング プランナーズ アソシエーツ内 (矢野大輔)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org <http://www.shomei-tanteidan.org>

照明探偵団通信

vol. 34 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート

ベトナム調査

ホーチミン / ホイアン

「Vietnam OLD × NEW」

(2009/4/7-11)

国内調査レポート

東京調査 : 浅草

「浅草らしさと灯りのかたち」

(2009/3/24)

照明探偵団倶楽部活動

キャンドルナイト@ OMOTESANDO

- Eco Avenue 開催

(2009/6/19)



ホイアンで毎月満月の夜に行われるランタンフェスティバル

海外調査：ベトナム 2 都市 「Vietnam OLD × NEW」

2009.04.07-11

小川基世 + 小松祐美

かつて東洋のブチバリと称されたベトナムは、都市ごとに様々な変化を遂げている。いたるところで工事が行われ、今まさに新しい景観が生まれようとしているホーチミン市。伝統的な町並みを守ること観光地としての地位を確立したホイアン。2つの対照的な都市を調査する中で、団員が感じたことは…。

■開発の続くホーチミン市の夜景

ホーチミン市北部に建つ 33 階建てのサイゴントレードセンター。現在のところホーチミン市で一番高いこのビルに上り、夜のホーチミン市を観察した。一番高い、とはいえそれほどでもない高さのせいか、昼間はオアシスのように輝いているのに夜には暗く沈んだ闇になってしまう。街路樹のせいか、道路がオレンジ色の線として浮かび上がる光景を見ることはできなかった。まだまだ低層の建物が多い中、ホテルなどの中層ビルは一定の存在感を示していたが、それと同様に目を引いたのが工事現場の緑色の光。工事中だらけのこの街では、工事現場の光も都市の夜景の中でひとつの要素となっているのだ。その中には 68 階建、ビテスコ・フィナンシャルタワーの建設地もある。ホーチミン市一の高層ビル、という名声がこのビルに奪われるまでそう遠くはない。



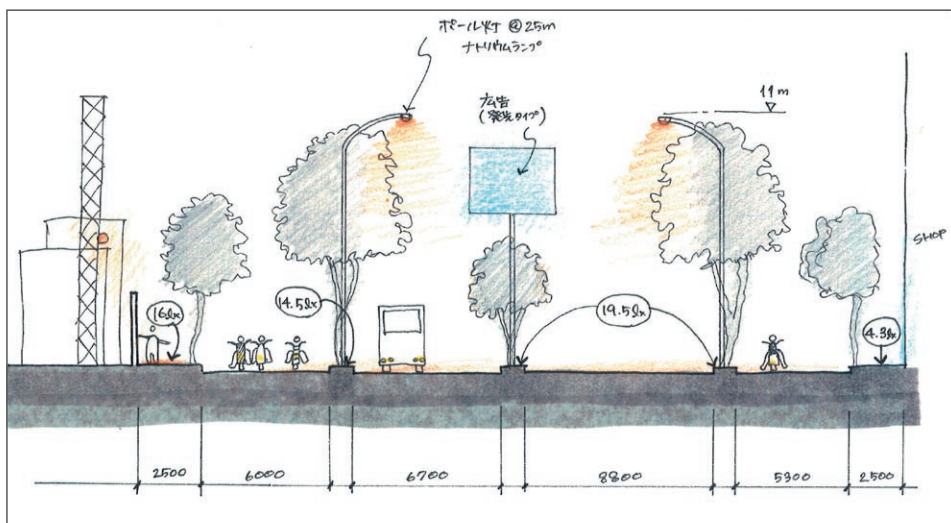
33 階から眺めたホーチミン市の夜景。暗い木に覆われた道路と工事現場の明さが印象的であった。

■バイクが主役の道路照明

「東洋のブチバリ」とはよく言ったものだ。ホーチミン市にはいくつかの多車線道路が通っているが、そのどれもが豊かな並木を蓄えている。どこまでも続く並木道は、熱い日射の降り注ぐこの街で目にも涼しく、シャンゼリゼ通りのそれを思い出させてくれる。ただし、昼間に限ってだが。この街では、それぞれにヘッドライトがついているバイクが通りの主役であるせいか、道路照明は必要最低限である場合が多い。ぎらぎらとまぶしい車道用ポール灯が広いピッチで配置され、並木道のアップライトはおろか、歩道用にはボードのひとつもない。開発中で足場が悪い道に至っては、バイクからの漏れ光がなければ歩くこともままならない状態だ。「東洋のブチバリ」それが夜の世界でも実現できたなら、この街の光はどんなに魅力的になることだろう。



バイクが主役の街の道路照明。写真を撮る我々の前を何台ものバイクが通り過ぎた。



ホーチミン市内の大通り、ハムギ通り。車道用ポール灯のみしかなく、植栽や人は暗く沈んでいる。

■蛍光灯の街

「昨今の LED ブームは広くアジアの夜に浸透している。ホーチミン市も例外ではなく、白熱電球が LED に取って代わられる姿があらこちらで見られるに違いない。」開発が進む街という言葉から、そんな考えを持ってホーチミン市に乗り込んだのだが。驚くことに、ベトナムの夜は蛍光灯一色の世界であった。通りに面した食堂からナイトマーケット、屋台、そして新しいデパートの中、すべてが蛍光灯のみで成り立っている。白熱灯を愛することもなければ LED に飛びつくこともなく、色温度や形状を使い分けながら蛍光灯のみで生活をしているのだ。屋台には白熱電球、デパートの演出にはハロゲンランプ、強烈なスポットにはメタルハライドランプ、均一な空間には蛍光灯…と使い分けるのが当たり前になっていた我々の目には、夜の街が少し寂しく映った。開発が進み、街が新たな景観に生まれ変わるき、光環境のみが置いてきぼりにならないことを願う。

(小川基世)



ナイトマーケット内の食堂。
このように電球型蛍光灯が吊り下げられている姿もよく目にした。



蛍光灯のみで構成された店舗。
街の開発とともにこれらの光は変化していくのだろうか。

■ランタン祭り

今回は満月の夜に行われるランタン祭りに合わせてホイアンへと調査に赴いた。

ホイアンは 16 世紀末 -17 世紀にかけて交易で栄えたベトナム中部の港町。ベトナム戦争でも破壊されることのなかった旧市街の町並みを保存し、観光地として生き残ろうとしている。旧市街は 1999 年ユネスコの世界遺産に指定された。

お祭りの会場はトゥボン川沿いを中心とした旧市街。十分歩いて回ることができる大きさで、当夜には歩行者天国になっている。

カメラと三脚を持ってできる限り歩き回った。

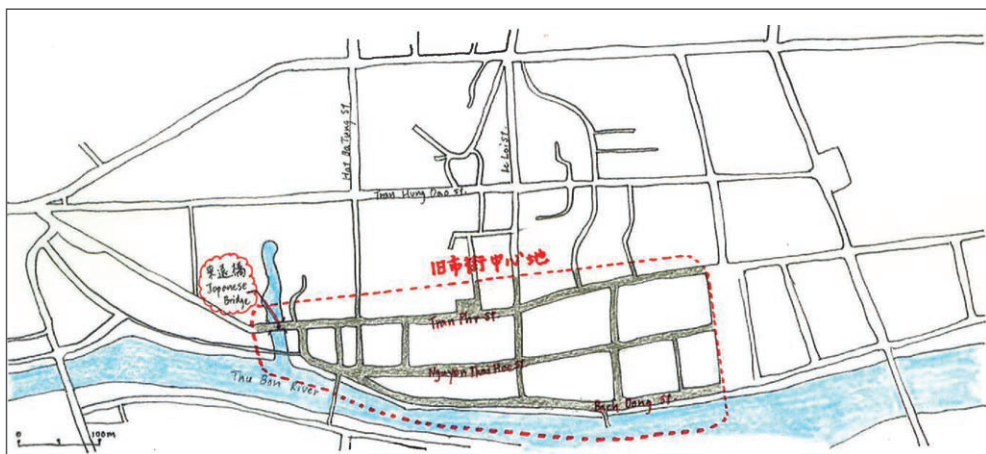
お祭りの間は旧市街の街灯は消され、店先のランタンやキャンドル、店内からもれる明かりが街並みを照らす。通りに建ち並ぶランタンの屋台も幻想的な雰囲気を作り上げている。通りの床面照度は 0.8-0.2 ルクスぐらいでかなり暗いはずだが、心地よい暗さだった。それも木々や店先に吊るされたランタンの優しい光が目に入るからだろう。



トゥボン川沿いの通り。木々には色とりどりのランタンが吊り下げられ、ランタンの屋台と共にお祭りのムードを盛り上げている。



ランタンであふれそうな通りの屋台。旧市街の通りは昼間とは違って変わって幻想的な雰囲気になる。



ランタン祭りの会場は川沿いの通りを含む旧市街。十分歩いて回れる規模だ。

旧市街の目玉といえる来遠橋は日本人が1593年に建てたとされる屋根つきの橋。こちらもランタンで飾りつけされている。また、屋根の瓦の隙間に入れられたハロゲンランプが屋根を縁取り、橋の袂のスポットライトとともに控え目にその姿を浮かび上がらせている。

通りの木々など、そこかしこにランタンが飾られ、キャンドルは通りに集う人々の顔をやさしく照らし出している。

川にもキャンドルが浮かびはじめる。そのキャンドルは地元の子供たちが川沿いにいつの間にか店を作り、売り歩いていた。

我々を含め観光客が目立ち、店舗もベトナムの実際の生活を反映しているというよりは観光地用に作られた感は否めないところがある。

しかし、ランタンで照らされた伝統的な町並みやろうそくの火の元に集う人々の様子に日常とは違う時間の流れを感じたり、タイムスリップしたような気分を味わうこともできるかもしれない。規模も大きすぎず、お祭りとしては落ち着いた雰囲気だったがランタンのこじんまりとした明るさとあっているように思われた。古いものを大切に、それを人々に伝える姿勢においては、ホーチミンなどの経済発展に集中する都市よりホイアンの方が進んでいるといえるかもしれない。地元の人々がその価値を本当に理解して参加したときに、それはもっと確かなものになるだろう。

■実は蛍光灯だらけ

白熱電球やろうそくが似合う町だが、光源は蛍光灯が中心。店舗はもちろん、ろうそくが似合いそうなレストランやバーのペンダントやテーブルランプもよく見るとシェードの中は蛍光灯。

ただ、光の色はアジアでよく見かける昼白色の蛍光灯ではなく、温白色でよく統一されている。伝統的な町並みに合わせての演出だろうか。

ただお祭りのランタンには白熱電球が多く使われていて少し安心した。

ここでも蛍光灯が使われていると、だまされたと思ってしまうのは照明に携わる者の悲しい性だろうか。

(小松祐美)



旧市街のフォーカルポイント、来遠橋（らいおんばし）。ランタンが天井を照らし出し、屋根と橋の袂に設けられたスポットライトとともに橋をわずかに浮かび上がらせる。



旧市街の通りの一角。ランタンと月あかりのもと、ベトナム将棋に興じる人々。ベトナムの夜の楽しみ方のひとつと言える。



川に浮かべるキャンドルを売る子供たち。後ろにはトウボン川中央に浮かぶ魚や牛などの光るオブジェが見える。



店先でキャンドルを並べているところ。店内には蛍光灯がついたままだが、店舗照明はほぼ100% 蛍光灯だった。

東京調査：浅草

浅草らしさと灯りのかたち

2009.03.24

久保隆文 + 藤井美沙

明治から戦後に至るまで、歌舞伎、オペラ、落語などの東京屈指の盛り場として栄えてきた浅草。多くの文化で栄えた街の灯りは装飾的で多種多様なかたちを見せてくれます。数多くの通りを調査した探偵団はあちらこちらで浅草らしい灯りのかたちに出会いました。

■浅草といえば、、、

浅草といえば浅草寺？公園六区？どちらの言葉が先に出てきますか？

浅草には重要伝統建造物である浅草寺と、その周辺には門前町として栄えてきた歴史ある街並みが今も残ります。一方で、浅草公園六区を代表とする、歌舞伎、オペラ、落語など東京屈指の歓楽街としてのイメージもいまだに根付いています。この対照的な二つの顔を持つ浅草では、夜の光環境も対照的でした。

浅草寺の表参道である仲見世通り。この通りの店は7時くらいには閉まってしまうものの、シャッターが閉まった後も、看板や軒下の白色蛍光灯が通りを煌々と照らしていました。床面で300～400lxという本もしっかりと読める明るさの仲見世通りを通り抜けると、両脇に電球色の提灯壁が現れます。その先には品良くライトアップされた浅草寺が闇夜に浮かび上がっていました。

白色から電球色、影の無い空間から快適な陰影のある空間へ、、、意図的なものかは分かりませんが、この仲見世通りから浅草寺へのアプローチは、表参道としての光のルールがあるように感じられました。



電球色の提灯壁の先には品良くライトアップされた浅草寺が闇に浮かび上がる。



白色の蛍光灯で照らされた仲見世通りは、夜でも本が読めそうなくらいの明るさ。

■飲み屋街の灯り

浅草寺の裏参道を通ると、公園六区と呼ばれる歓楽街地区へぬけられます。

ここでは寄席や劇場などかつての歓楽街としての浅草が今も残り、夜も人で賑わっていました。寄席があるメインの通りは街路灯も周辺の建物もギラギラした光が溢れているように感じられますが、少し路地を入ると、下町情緒溢れる街並みや、軒に赤提灯のぶら下がった飲み屋街も見受けられます。

飲み屋街の通りの床面照度は10～60lx程度と少し暗く感じられますが、暗い通りに連続的につながる赤提灯の光は、仲見世通りの白く明るい光環境とは対照的に、不思議な安堵感を与えてくれます。

この通りでは店の軒に赤提灯をぶら下げなさい！といった光のガイドラインでもあるのでしょうか。こんな何気ない通りにも光のルールがあるように感じられました。

(久保隆文)



どの店にも軒に赤提灯が連なっています。この通りで決められた光のルールなのでしょうが。.



下町情緒溢れる飲み屋街の街並みは、不思議と安堵感を与えてくれます。

■灯りのかたち

通りの照明環境は、路面の明るさを補う光、店先の品物や閉店後のシャッターを照らす光。そして、街路灯や行灯などオブジェとしての光など、多くの光が混在しています。路面への光はメタルハライドランプ、店先を照らすスポットライトにはビーム球やダイクロハロゲンのスポットが使われ、お店の看板や軒先には、蛍光灯が使用されています。混在する光の中でも、通りごとの特徴を作り出しているのは街路灯や行灯などオブジェとしての光です。多くの商店街はそれぞれ独自の街路灯を設置しており、ポール先の灯具はデコラティブで多種多様。名芸人、役者の顔写真が飾られている街路灯や大きな提灯のつく街路灯、江戸の風習である地口が行灯に書かれた街路灯、そして懐かしいメロディーの流れる街路灯など、、、それぞれ通りの個性となつて賑やかさや活気の演出を一手に引き受けています。また、街路の鉛直面に看板照明があまり設置されておらず、街路灯は存在感たっぷりに輝きます。浅草だけでなく昔ながらの商店街では、まだまだこのようにデコラティブな街路灯の光が主役の通りが見られます。それらは、ぎらぎらとまぶしいグレアとなつて嫌われる存在であることが多いように思いますがここ浅草では、きらきらとまぶしいほどに輝く街路灯も浅草の文化の1つとして、街の人々に愛されている光であると感じました。

■白く光るライン

通りの照明でもう1つ忘れてはならない浅草の光は、通りの天井に走る白色の光のラインです。アーケード型の商店街では、商店が開店中はもちろん、閉店後も通りは明るく、路面照度は300～400lxほどです。調査をしながらアーケード街を通り抜けると、通りの交差点にシャンデリア風に配置された水銀ランプ照明器具を発見しました。その明るさに目をチカチカさせながら路面照度を測ると、直下では700lxにまで達していました。ランプの配置計画だけではなく、路面の照度計画も再検討されると、賑やかなだけでなく快適でECOな照明環境の通りとして生まれ変わるはずです。

■見下ろす浅草

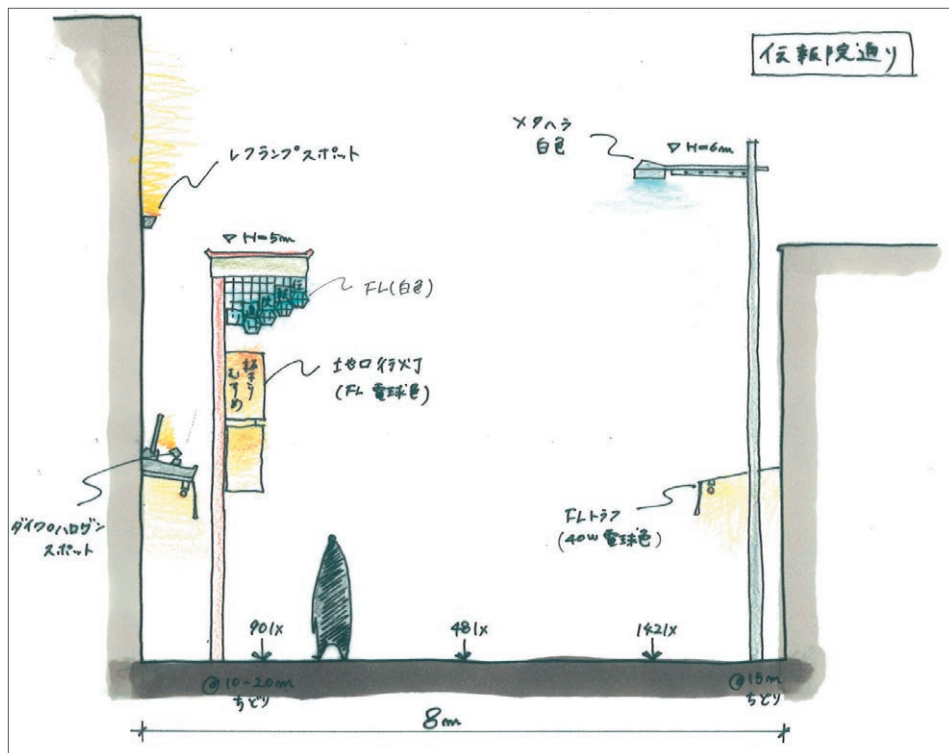
近くの建物からの浅草の街を見下ろすと、浅草寺や五重塔がライトアップされ印象的に浮かび上がり、花やしきがカラフルな光を夜空に放つ夜景を目にすることが出来ます。また、仲見世の看板の光が漏れ真っ白な参道が浅草寺へと続く様子がわかります。地上からの夜景は、通りに並ぶたくさんの街路灯に賑やかで活気のある印象を受けましたが、高所からの夜景では、街路灯が建物に隠れ直接目に入ってくる光が少ないためか、街の中を歩いていて感じるほどの活気や賑わいは感じられませんでした。隅田川の対岸に東京スカイツリーが建設され、ますます高所から見下ろすと、また違った印象の浅草の夜景を見ることが出来るかもしれません。(藤井美沙)



いろいろな灯りのかたちが賑やかに並ぶ伝法院通り。閉店後も通りは賑やかです。夜の散歩にいかがですか。



名芸人・役者の写真が楽しい六区通り。それぞれの街路灯につく紹介文を読破すればあなたも上方漫才通！？



無数に並び天井を埋め尽くす蛍光灯群。蛍光灯の配置もバリエーションが豊富です。

街路灯には多様なランプが使用されています。灯りのかたちも多種多様で通りの個性を生んでいます。



浅草のシンボルが浮かび上がる夜景。闇に浮かび上がる仲見世の白い光のラインや本堂を発見できます。

キャンドルナイト @OMOTESANDO Eco Avenue 2009 夏至

2009.6.19

矢野大輔 + 小川祐樹 + 藤井美沙 + 古田陽子

「でんきを消して、スローな夜を」をスローガンに、キャンドルを灯していつもと違った時間の過ごし方をしてみよう…という2003年の夏至から始まった環境NPOによるこのムーブメントは、今や日本全国で夏至と冬至の一大イベントとして様々な場所で行われています。

■Candlelight @ OMOTESANDO -Eco Avenue

2009年6月19日(金)夜8時から10時の2時間、表参道でキャンドルナイトが行われました。2005年の夏至から始まり、今回で6回目を迎えます。今年のテーマは「グリーン」です。優しさの代名詞、地球環境や自然環境をいとおしく思う時のキーワードとして掲げています。今年からはキャンドルのデザインだけでなく、LED(発光ダイオード)の使用を解禁し、東京近郊の美大生を中心とした総勢482名のスタッフが、表参道をあたたかなキャンドルとLEDの共存するあかりでケヤキ道を彩りました。

■キャンドルインスタレーション

表参道沿道のビルや店舗の軒先にあるスペースをお借りして行うキャンドルインスタレーション。今年もさまざまな作品がイベントを盛り上げました。

自然と都市の架け橋をテーマに、大きな観覧車をモチーフとしたダイナミックな作品や、かつてあった渋谷川の面影をキャンドルの灯りで蘇らせた幻想的な作品。また、東京に緑が広がっていくことを願い、たくさんの枝とLEDを使い森のような空間を表現した作品など…今回のメインテーマである「グリーン」から発想し、都市や自然に対する学生たちの強いメッセージの込められた作品が多く見られました。

また、表参道の人通りの多い場所で行うインスタレーションだけに、火の管理など安全対策は特に注意深く行わなければいけません。学生チームは何度も実験を行い、場所を貸してくださる方にも事前の打合せや現場でのリハーサルにご協力を頂きました。はじめのうちは対策の足りない作品も目立ちましたが、本番直前にはしっかりとした対策で安心して設置できるようにまで仕上げることができました。単なるデザインだけではなく、安全面にも対処しなければならない作品制作は学生たちにとって、大学の授業以上にシビアで大変だったのだと思います。どの作品もくたくたになりながら作り上げた力作ですので、当日はたくさんの来街者で会場が埋め尽くされた様子を、学生スタッフと共に感動と安堵の気持ちでいっぱいでした。

メッセージとパワーがぎゅっと詰まったインスタレーションを、イベント2時間の間しか楽しむことが出来ないことは本当に残念です。この名残惜しさが次に繋がっていくきっかけなのだな、と前向きにとらえつつ、大勢のメンバーとドタバタと準備に明け暮れ、どっぴりとキャンドルの魅力に染まってしまった…そんなキャンドルナイトでした。(藤井美沙)



総勢482名がキャンドルナイト@OMOTESANDO - ECO AVENUEに参加し、表参道の街全体をキャンドルのあたたかなあかりで彩りました。



東京の街の電灯が消えキャンドルの灯りのみが灯る風景をつくった作品です。街中が暖かい灯りでいっぱいになった風景を想像すると素敵ですね。



キャットストリートに蘇る懐かしい渋谷川の面影。ゆるやかに並ぶ筒はなんとたくさんの綿棒で出来ています。

■キャンドルカフェネットワーク

挨拶廻りのための電話掛けから私と街カフェとの接点が始まった。

「私、毎年6月に開催されるキャンドルナイトの実行委員の…」「キャンドルナイト？」

店側の反応は鈍い。仮にキャンドルナイトの存在を知っていても「今、忙しいから掛け直して」というカフェもしばしばだった。

一方、学生たちの意気込みは初めから目を見張るものがあった。希望場所を募るも希望がいくつも重なり、プレゼンで決定する事となる。どうしてもこのカフェでデザインしたい、という熱意がひしひし伝わってくる。こんな様子をカフェ側の人達にも是非見て貰いたい、と思ってしまう。

当日「ファーマーズカフェが機械故障で今日の営業はしない」という情報が入る。ファーマーズカフェは希望チームが4チームも出た人気カフェだった。その人気店を勝ち取ったチームが当日になって店内キャンドルを披露できないなんてさぞかし悔しかっただろう。
(古田陽子)

今年は23箇所ものカフェから参加表明を頂き、キャンドルを用いたインスタレーションを行ったり、お店で独自にキャンドルを灯して営業していただいたりしました。昨年から比べて参加店舗数がますます増え、猫の手も借りたいくらいです。

デザインチームは少人数でてんでこ舞いになりながら作業に当たり、とても大変だったと思いますが、直接店舗とやり取りしてデザインを作り上げていく難しさや、自分の100%のデザインが受け入れられなかった時の対応など、ただ漠然と学生生活を送っているだけでは得られない、作り手として大切なものを学んだと思います。

当日、カフェに置かれているキャンドルのうち、途中経過で不安があったデザインがこれでもかと言うくらい美しくカフェにマッチしている姿を見た時は、これまでの苦勞が吹き飛ぶくらい嬉しくて、言葉では表せないくらいの感動に包まれてしまい、今年も素敵なキャンドルナイトになったなと感じさせてくれました。ありがとう！
(矢野大輔)



テントウムシがロウで出来たキャベツにとまっている?!と思ったら、ロウで出来たテントウムシだ！



捨てられる運命の空き缶にいのちが吹き込まれ、もう一度輝き出す。



水に閉じ込められたバラは、フローティングキャンドルの明かりでゆらゆらと浮かび上がる。美しい…



ハスの花をイメージして形作ったロウが、キャンドルの光で厳かに照らされている

■子供たちのキャンドルパレード

20時からの消灯に先駆けて、19時ちょうどに神宮前小学校の子供たちが校門前をスタートしました。その手に持っているのはかわいらしい小鳥の行灯。これはイベント二日前の放課後、子供たちが時間をかけて作った小鳥たちです。絵の具や色紙で鮮やかに彩られた小鳥から、赤いとさかのついた鶏のようなものまで、子供たちが想像力をいっぱい膨らませて作った小鳥たちは、この日それぞれにイノチを灯され、生みの親ともいえる子供たちに抱えられて、表参道を行進しました。

水とキャンドルが揺らぐ表参道ヒルズの貫通通路を抜けて通りへと出てきた子供たちは、無邪気な笑顔を見せながらも、両手ではしっかりと小鳥を抱え、火を消さないようにと慎重に街を歩きます。途中シュウウエムラのお店の前では、子供たち一人一人にドラジェと呼ばれるお菓子が配られ、そのおいしいプレゼントにみんな大喜びでした。

パレードは最後にキャンドルナイトの本部がある交番横の広場へと向かいます。ここには木の枝で組まれた光るオブジェが広げられ、到着した子供たちから順に小鳥を枝の上に飾っていきます。小鳥の集まる森をイメージしたこのインスタレーションは子供たちの小鳥が揃うと完成です。徐々に思い思いの枝の上に放されていく小鳥たち、風でキャンドルの明かりが暗くなったり明るくなったりする様子はまるで、羽を休めた小鳥たちが呼吸しているようにも見えました。子供たちが、消さないようにと大切に運んだイノチたちからは、みているだけの私もなんだかやさしい気持ちにさせられる、そんな暖かさが感じられました。

(小川祐樹)



神宮前小学校の子供たちが、グリーンパードのお兄さんやお姉さんたちと一緒に、みんなで楽しく色とりどりの小鳥を作りました。



いよいよ小鳥の中にキャンドルを灯してパレードがスタート。灯が消えてしまわないように両手で大事に抱えて歩いていきます。



パレードのゴール地点に並べられた枝のオブジェには、表参道を一周してきた子供たちの小鳥が一羽また一羽と徐々に集められています。



子供たちの手を放れた小鳥は、枝の上で静かに羽を休めながら、これから始まる2時間のキャンドルナイトを見守ります。

■オリジナル行灯

60 人の行灯デザイナーが 200 人以上のスタッフを引き連れ、グリーンというテーマに沿って製作された一つ一つデザインの異なる趣向を凝らした行灯を手にも、表参道中に散らばってキャンドルナイトを盛り上げます。原宿駅から表参道駅までの、およそ 1km もある表参道の沿道に点在する約 30 箇所のインスタレーションやカフェを柔らかなあかりを纏うたくさんの行灯が繋ぎ、表参道の街全体を一つの空間にまとめる役割を果たしていました。

デザインは一つとして同じものが無いので、カメラを持った来街者はすれ違うたびに立ち止まり、自身のブログにアップでもするのにか至る所でパシャパシャと撮影会が行われます。

行灯を持つスタッフもやるならことん楽しまなくちゃ！とサービス精神旺盛で、ある行灯のグループは衣装を合わせてみたり、ある行灯のグループは写真を撮られるたびにポーズをとってみたりと、キャンドルナイトイベントに花を添えていました。

そのなかでもひときわ目立っていたのがキャンドルの妖精さん（！？）です。LED で優しく彩られた衣装を着て、4 人グループで街を歩き回りながらマッチやティーキャンドルを配り歩きます。その人たちと一度目を合わせてしまうと、強制的にキャンドルナイトグッズを渡されてしまうとのこと。嬉しいやら怖いやら…。それはさておき、妖精さんたちはキャンドルの優しいイメージにぴったりとマッチ。個人的には来年も出現することを願っています。

「オリジナル行灯」は、回数を重ねるごとにますます candlelight @ OMOTESANDO - Eco Avenue の重要な位置を占めるようになりました。来年はさらに規模がグレードアップしているはず！来年訪れる時は、是非お気に入りの行灯を見つけてみてください。

（矢野大輔）



牛乳パックのお家から漏れる暖かな光が気持ちいい。キャンドルをつけて、スローな夜に。



ごみを否定しながら作品の一部に取り入れたオススメの一品。ごみで埋もれて光が見えなくなっていなければいいけれど…



4 人組で出没したキャンドルの妖精さんのひとり。名前は…コメットさん？



妖精さんの足元には光る LED のオブジェがきらり。思わずついていっちゃいそうだ

■編集後記

今回から新たにこの場にコラムを作ることになりました。探偵団員が調査した時のこぼれ話や、記事には出てこないエピソードなどを紹介していこうかと思います。今回行ったベトナム調査は調査者2人とも初めての海外調査で、カメラも一眼レフに慣れていない様子。ホーチミンからホイアンまでは飛行機やタクシーを乗り継ぎ悪路の中移動したので、電車ですら酔ってしまう小川団員は酔い止めが必須だったようです。浅草調査は、文化を知るという名目で花やしきの遊具上から高所撮影を行ったり、寄席を観劇するなど、調査のベテランらしく楽しみながらもしっかりと調査をしてきました。

ますます規模が大きくなるキャンドルナイトは、都内でも有数のキャンドルナイトイベントになりつつあります。来年は広報活動に力を入れ、さらなる認知度向上に努める予定です。今年見られなかった団員も、来年は是非足をお運びください。さて、今回は北京で初めて行われる Transnational Tanteidan Forum や、探偵団サロンのご報告、また、2年目の団員1人と1年目の団員2人が参加し、再開発の号令がかかった、変わり行く下北沢周辺の今を調査いたします。初々しい報告をご期待ください！

(矢野大輔)

【照明探偵団の活動は以下の20社にご協賛頂いております。】

ルートロンアスカ株式会社
岩崎電気株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
パナソニック電工株式会社
ヤマギワ株式会社
マックスレイ株式会社
ニッポ電機株式会社
エルコライティング株式会社
ウシオライティング株式会社
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン
東芝ライテック株式会社
コイズミ照明株式会社
マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社
タルジェッティ ポールセン ジャパン株式会社
湘南工作販売株式会社
トキ・コーポレーション株式会社
山田照明株式会社
株式会社遠藤照明
株式会社ウシオスペクス
森山産業株式会社



探偵団通信に関してのご意見・ご感想等随時受付中です！

お気軽に事務局までご連絡ください。

e-mail:office@shomei-tanteidan.org